

「私たちのちかい」を味わう

ご門主が、「中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまなか機会で唱和していただきたい」と、ご親教「念仏者の生き方」の肝要を4力条にまとめられた「私たちのちかい」。その言葉に親しみ、味わいを深めるため、本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に執筆いただきました。

満井秀城
(みつゐ しゅうじょう)

一、自分の殻に閉じこもることなく

穏やかな顔と優しい言葉を大切にします

微笑み語りかける仏さまのように

「生きづらさ」がキーワードとなっている現代社会は、他者とのコミュニケーションに疲れ、その必然として、他者との関わりを避けたがります。「自分の殻」は、その苦痛に対する自己防衛として形成されたとも考えられ、苦悩は察するに余りあります。

しかし、私たちは、誰一人として、他者と関わらず、自分一人で生きていくことはできません。まさに、「縁起的存在」なのです。『華嚴経』に「インダラの網」という譬えがあります。その網は多くの宝石の珠で作られ、一つの珠には、他の珠すべてが映っています。それが、お互いの関係性を表しています。一方で、一つ珠が欠けてなくなったとしたら、「網」でなくなりません。つまり、一つひとつは、かけがえのない存在でもあるのです。

「殻」が自己の価値基準に閉じこもるものであるなら、

私^{わたし}たちのちかい

一、^{ひとつ} 自分の殻^{から}に閉^とじこもることなく

穏^{おだ}やかな顔^{かお}と優^{やさ}しい言葉^{ことば}を大切^{たいせつ}にします

微笑^{ほほえ}み語り^{かた}かける仏^{ほとけ}さまのように

一、^{ひとつ} むさぼり、いかり、おろかさに流^{なが}されず

しなやかな心^{こころ}と振^ふる舞^まいを心^{こころ}がけます

心安^{こころやす}らかな仏^{ほとけ}さまのように

一、^{ひとつ} 自分^{じぶん}だけを大事^{だいじ}にすることなく

人^{ひと}と喜^{よろこ}びや悲^{かな}しみを分^わかち合^あいます

慈^{じひ}悲^ひに満^みちみちた仏^{ほとけ}さまのように

一、^{ひとつ} 生^いかされてい^いることに気^きづき

日々^{ひび}に精^{せい}一杯^{いっぱい}つとめます

人^{ひと}びとの救^{すく}いに尽^つくす仏^{ほとけ}さまのように

「殻」で身を守るのではなく、殻を開いて、他者と関わりながら、自分の生き方を見つけてほしいと思います。

昔の譬え話に、こんな話がありました。ある貝は、とても丈夫な殻を持ち、外敵が襲ってきたらすぐ殻を閉じ、「自分は最強だ」と思っていました。ある時、海に網が投げられ、「敵だ」と思い、いつものように殻を閉じて防御しました。しかし気がついたら、魚屋の店頭に並んでいたという話です。自己防衛の「殻」も無敵ではありません。

別の側面で言うと、「自分の殻」は、信心や念仏を、自分の世界だけで完結させてしまいます。信心や念仏の喜びは、他者に向かつてもはたらくのです。親鸞聖人は『教行信証』に、阿弥陀仏の救いを「磁石のごとし」（『註釈版聖典』201ページ）と示されます。そして、その所以を「本願の因を吸^すふがゆゑに」と述べられます。

釘が磁石の磁力によって引き付けられた時、今度は、その釘に伝わった磁力で別の釘を引き付けます。私が阿弥陀さまの磁場となった時、私の側には本来なかった、「穏やかな顔と優しい言葉」が出てくる身に育てられるのです。阿弥陀仏の「微笑^{ほほえ}み」を思い、幸せの「おすそわけ」を、人にも伝えていきたいものです。

一、むさぼり、いかり、おろかさ^にに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

「むさぼり、いかり、おろかさ」は、煩惱の代表とも言える「三毒」です。念仏申す身になっても、煩惱がなくなることはありません。死ぬまで「煩惱具足」の身であることは、何も変わりません。親鸞聖人が、『一念多念文意』に、

無明煩惱^{むみょうぼんごう}われらが身にみちみちて、欲もおほく、
いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひ
まなくして、臨終^{りんじゅう}の一念にいたるまで、とどまら
ず、きえず、たえず
(同 693 ページ)

と述べられる通りです。

その一方で、念仏者は何も変わらないのかというと、
例えば、迷信には惑わされなくなったという明確な変化
も自覚できます。

法然聖人は、

煩惱をば心のまら人(客人)とし、念仏をば心のあ

るじとしつ

(『和語灯録』)

と述べられ、蓮如上人も同様の意を、『蓮如上人御一代
記聞書』に、

弥陀をたのめば南無阿弥陀仏の主^{ぬし}に成るなり

(『註釈版聖典』千 309 ページ)

と説かれています。私たちの不実な煩惱を自らの主とせ
ず、南無阿弥陀仏を主とするのが、念仏者です。

親鸞聖人もまた、

慶^{よろこ}ばしいかな、心を弘誓^{ぐぜい}の仏地^{ぶつじ}に樹^たて
(同 473 ページ)

と、自らの立脚点を「弘誓の仏地(阿弥陀仏の本願)」に
置く慶びを語っておられます。

一、自分だけを大事にすることなく

人と喜びや悲しみを分かち合います

慈悲に満ちみちた仏さまのように

私たちの自己中心性は、他者を蹴落とし自分だけが優
位に立とうとします。そういう競争社会の中に、否応^{いやおう}な

く投げ出されているのが現代と言えます。

学校では成績偏重で、「受験」はまさに「戦争」です。会社でも、「出世」は競争原理に支配され、ライバルを蹴落とす椅子取りゲームの状態です。経済も、「自由競争」の美名の下に格差は拡大の一途で、「勝ち組、負け組」という言葉も流行りました。「いじめ」や「差別」も、他者を傷つけ、自分が優位に立つとするあり方です。

大乘仏教の基本精神は、「自利利他」と言われています。それも、「自利」を仕上げてからの「利他」ではなく、「利他」あつてこそその「自利」です。その最も完成された形が、阿弥陀仏の「若不生者、不取正觉」（衆生を救わずしては、自らもさとりをひらかない）の誓いでしよう。私たちに、阿弥陀仏の真似はとでもできませんが、「いじめ」や「差別」で他者を傷つけても、決して勝者にはなりません。他者を傷つけることで、自分自身の値打ちを下げて、自分も傷つけているおろかさかさに気付かねばなりません。

一、生かされていることに気づき

日々に精一杯つとめます

人びとの救いに尽くす仏さまのように

人々の孤独感の一つとして、「何のために生まれてきたんだらう」、「好きで生まれてきたんじゃない」、「自分なんか生まれてこなきゃよかった」などの悲痛な声を聞きます。しかし、人間ほど育児期間を長く要する動物はいません。家族や友人だけでなく、学校や病院といった社会施設など、自分の気付かない、さまざまな「おかげ」によって生かされているのです。

私たちには、人それぞれの持ち分や個性があります。阿弥陀仏は私たちに、できないことを求めはされません。しかし、できるとわかっていてしないのは、ただの怠慢です。できることを「精一杯」に努めさせていたかどうかのです。私たちのご報謝は、「もうこれでいい」というゴールはありません。返しても返しきれないご恩には、不断の精進をもって報いる他ない厳しさがあるのです。

（本願寺派総合研究所副所長・司教）

※「本願寺新報」2月10日号にも同文を掲載。